昭和42年度埋蔵文化財緊急調査概報

伝鞠智城跡

熊本県教育委員会

序

まぼろしの城とさえいわれてきた肥後国の鞠智城跡は、熊本県鹿本郡菊鹿町米原の一帯に草深く埋もれたまま受け継がれてきた。

しかるに、最近とみにはげしくなった開田事業のあおりで、この重要な史跡も今のうちに調査をしなければ、永久に失なわれかねない状態となった。

ここに熊本県では昭和42年度から3ケ年計画をもって国の補助を得、全国的にも重要な上代山城の跡を早急に調査することになつた。本年度はその第1年目として昭和42年7月24日から2週間の期間、先づ表面調査により「鞠智城」の範囲を明確にし、必要な地区の記録撮影や実測図を作成するとともに、将来保護すべき地域、遺構の確認につとめた。

本書は、その年度計画による第1年目の調査結果の概報であるが、初年度の調査によりいろいろの成果が得られて「伝」の字が消え「鞠智城跡」と改められる日も近いうちに実現するものと思われる。

本調査に当たり終始御協力下さった下記の熊本県文化財専門委員の方々をはじめ、県内在住の研究家の方々及び地元関係者の方々に対し、深く感謝する次第である。

なお、本書の刊行に当たり、御多忙の中に執筆下さった諸先生方に対して、ここに厚く御礼を申し上げるものである。

昭和43年3月

熊本県教育委員会

調査団の構成

主催者

熊本県教育委員会

調査担当者

調査指導		九州大学教授	鏡山　猛
調査団長	熊本県文化財専門委員	熊本女子大学教授	乙益重隆
調査員	同	熊本県指導主事	田辺哲夫
	同	第二高校教諭	原口長之
	同	熊本大学教授	松本雅明
		肥後考古学会長	坂本経堯
		荒尾三中教諭	三島　格
		山鹿高校教諭	隈　昭志
		山鹿高校教諭	杉村彰一
		碧水小教諭	平岡勝昭
		熊本農高教諭	納富正浩
		熊本大学助手	佐藤伸二
		肥後考古学会員	緒方　勉
		社会教育課主事	上野辰男

調査補助員　熊本大学学生、熊本農業高校、山鹿高校、第二高校生徒他

調査事務局

調査責任者　社会教育課長　重石隆三

社会教育課	課長補佐	木村　繁	文化係長　松田安雄
	庶務係長	伊藤昌弘	主事　上野辰男
	主事	富永　久	主事　高浜知完
	主事	福田那智子	主事　高木幸代
	主事	東大森慶子	

調査協力者

菊鹿町長　飯川　巌	菊鹿町教育長　富田　貞
菊池市教育長　佐々守造	菊鹿町社会教育主事　高田貫一
菊池市社会教育課長　津留　清	
米原部落区長　原田成一氏他	堀切部落区長　河津三郎氏他
頭合部落区長　木野政幸氏他	医師　松尾公倫

地主

米岡　明、木野政敏、村上幸人
徳丸信敏、高木二一、米岡孝臣
高木周行

伝鞠智城跡第一次調査概報

本　文　目　次

1. 経過の概要 …… 1
2. 鞠智城の歴史 …… 2
3. 鞠智城研究略史 …… 4
4. 古代山城の遺構 …… 5
   (1) 地理的位置 …… 5
   (2) 遺跡・遺構の概要 …… 5
   (3) 池ノ尾の門礎石 …… 7
   (4) 堀切の門礎石 …… 10
   (5) 深迫の門礎石 …… 14
   (6) 馬こかしの道 …… 22
   (7) 三枝石垣 …… 26
   (8) 佐官どん …… 28
   (9) 米原部落内の礎石群 …… 31
   (10) 少監どん・紀屋敷 …… 32
   (11) 長者原の遺構 …… 33
   (12) 宮野礎石群 …… 36

挿　図　目　次

1. 長者原全景 …… 2
2. 遺跡位置図 …… 5
3. 遺跡付近の地形図 …… 折込
4. 池ノ尾遠景 …… 7
5. 池ノ尾門礎石周辺地形図 …… 8
6. 池ノ尾の門礎石 …… 9
7. 池ノ尾の門礎石実測図 …… 9
8. 池ノ尾の門礎石付近土壙断面図 …… 10
9. 堀切地形図 …… 11
10. 木野神社の門礎石 …… 12
11. 堀切の門礎石 …… 12
12. 堀切の遠景 …… 13
13. 堀切の門礎石 …… 13
14. 木野神社の門礎石 …… 13
15. 深迫の門礎石周辺 …… 14

16. 深迫の地形図 …… 16
17. 深迫の門礎石 …… 17
18. 深迫の門礎石の実測図 …… 17
19. 深迫の門礎石周辺 …… 18
20. 深迫の門礎石周辺トレンチ …… 19
21. 馬こかし遠景 …… 20
22. 馬こかし地形図 …… 21
23. 馬こかし石垣 …… 22
24. 馬こかしの石垣実測図 …… 23
25. 三枝石垣地形図 …… 24
26. 三枝石垣実測図 …… 25
27. 三枝石垣 …… 26
28. 佐官どん地形図 …… 27
29. 佐官どん礎石群堆積図 …… 29
30. 佐官どん全景 …… 30
31. 佐官どんの礎石群 …… 30
32. 米原西方の山地 …… 32
33. 少監どん …… 34
34. 長者原礎石列 …… 35
35. 宮野地形図 …… 36
36. 宮野瓦出土地状況 …… 37
37. 宮野礎石列所在地 …… 37
38. 米原地区測量図 …… 折込

1 経過概要

伝鞠智城跡として熊本県がその一部を史跡に指定したのは昭和34年12月8日のことである。この時指定されたのは地表にその遺構を見ることができる鹿本郡菊鹿町大字米原字長者原 530番地、通称金蔵といわれる礎石列のある地点と、菊池市大字木野字深迫1907番地、今回調査をした深迫の門礎石があった場所だけであつた。遺構のほとんどが地下に埋まっていた指定当時にあつては、遺跡の保護についてそれほど問題にはならなかつたし、また現在のように指定について直接保護問題と結びつけて考えなくてよかったと思われる。

しかるに昭和40年を契機として熊本県内には急速な農業構造改善、畑地開田等の開発事業がはじまつた。そして旧地貌の復原さえも不能になるような大工事がいたる所で行なわれはじめた。とくに昭和41年9月には鞠智城の中に遺構の存在が想定されていた米原台地の中央部、長者原一帯にブルドーザーが進入し、畑地桑園の水田化工事が開始され、それによって数多くの礎石、焼米、古瓦が何らの記録も残すことなく失われてしまった。

この遺跡は現在まで何度か部分的な調査がなされているが、全域にわたる詳細な学術調査がおこなわれたことはない。そのため保護対策に大きな支障を生じ鞠智城を永久に謎のままに葬るおそれさえあつた。故に将来この地での開発計画が存続する以上、現地調査はきわめて緊急を要することとなつた。

しかるに城域はきわめて広大にわたり、調査を単年度でおわることは諸種の事情で困難性があるため、本年度は従来明確でなかった遺跡の外郭線を明らかにすることと、基本的な実測図の作成に主力をおいて調査を実施した。調査については昭和42年度埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助をうけて熊本県教育委員会が主催し、地元菊池市及び菊鹿町教育委員会が共催した。そして昭和42年7月24日から8月2日までを第1次調査とし、昭和43年3月10日から3月12日までを第2次調査とし2期にわけて実施した。

調査の経過については後段の調査日記の通りである。第1次調査には、城の外郭線の確認、米原地区測量図作成、所在が明らかな門礎石地点の調査に主力をおき、第2次調査においては、第1次調査によって作成した米原地区測量図の修正と、米原地区内遺構の探索に主力をおいた。

両次の調査とも気候にはあまり恵まれなかつた。とくに第1次調査時には酷暑の密生した山林中の作業等で筆舌につくしがたい苦労もあったが、初年度の調査として予期以上の成果をあげ得たと思う。しかしながら鞠智城の全貌を明らかにするには、不明な点があまりにも多い。開発攻勢激化の折、この調査はできる限り早急に実施する必要があると考える。

なおこの概報の執筆については次の調査員が担当した。

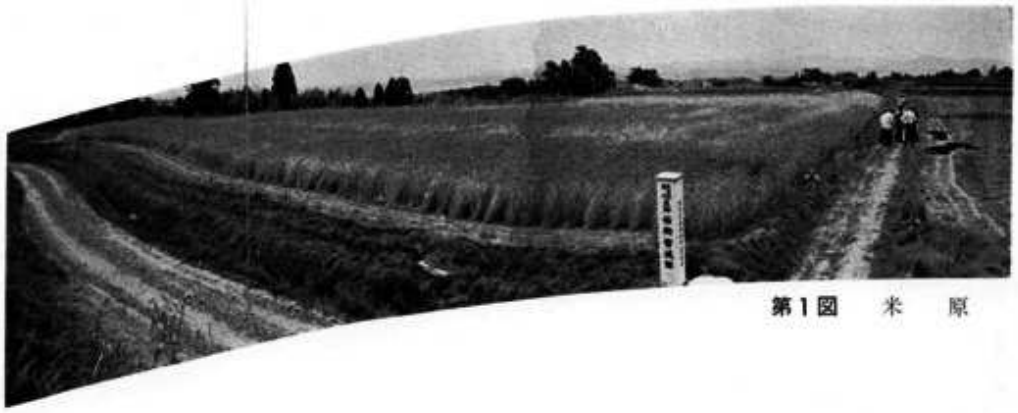
1. 経過概要（上野辰男）**2.** 鞠智城の歴史（乙益重隆）**3.** 研究略史（坂本経堯）**4.** 古代山城の遺構、(1)地理的位置、(2)遺跡遺構の概要（坂本経堯、乙益重隆）、(3)池ノ尾の門礎石、(4)堀切の門礎石（原口長之）、(5)深迫の門礎石（三島格）、(6)馬こかしの道（隈昭志）、(7)三枝の石垣（杉村彰一）、(8)佐官どん（田辺哲夫）、(9)米原部落内の礎石群、(10)少監どん紀屋敷、(11)長者原の遺構、(12)宮野の礎石群（乙益重隆）、小結（乙益重隆）（上野辰男）

2 鞠智城の歴史

鞠智城のことがはじめて史上の記事にみえるのは、続日本紀文武天皇2年（698年）5月の条に「甲申、大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕ひ治めしむ」とあるのが最初である。当時この城は大宰府の北の備えとして設けられた大野城と、西南方の備えとして設けられた基肄城とともに、南の備えとしてとくに重要な施設であつたことがうかがわれる。これより先に大野、基肄城の築城については、日本書紀天智天皇4年（665年）秋8月の条に、百済の王族出身でかつ、祖国を失い日本に亡命して来た達率憶礼福留・同四比福夫をして、筑紫国において大野および椽（基肄）の二城を築かしめたことがみえる。故にこれらの二城とともに、33年後になって繕治せしめる必要を生じた鞠智城も、大野・基肄の二城と相前後した頃築かれたことがうかがわれる。

日本書紀によると西暦6世紀の中頃は、わが国にとって内憂外患、多事多難な時代であった。すなわち645年孝徳天皇の大化元年には大化改新が行なわれ、その国内整備もととのはないのに朝鮮半島では、つぎつぎに重大な事態が生じた。そして天智天皇2年（663年）には、百済救援のため出兵していた日本の水軍と、唐の水軍が今の韓国忠清道錦江の河口にあった白村江において激戦し、ついに日本は敗北し、百済は滅亡するにいたった。このような国防上の急にそなえて日本の各地には、多くの防塞施設が設けられた。まず天智天皇3年には対馬・壱岐・筑紫国に防人と烽を置き、筑紫に水城が築かれた。ついでその翌年には長門国に城が築かれ、大野・椽城が築かれたことはすでにのべた通りである。さらに同六年には倭国に高安城を、讃吉国山田郡に屋嶋城を、対馬国に金田城が築かれた。このような情勢下にあって鞠智城も築かれたのである。

鞠智城はどこに築かれたのか、日本書紀にも続日本書紀にも明らかでない。しかし後にのべるように平安時代になって、史上の記録に散見する菊池城が肥後国にあったことと、ここにのべる鹿本郡菊鹿町米原を中心とする遺構を考える時、それがこの地にあったことは疑念の余地がない。とくに鞠智はクク



第1図　米　原

チと読まれ、平安初期に編纂された倭名類聚抄によると、肥後国菊池は久々知とよばれた。故に上古の終り頃まで鞠智と書かれたのが、奈良時代になって二字好字佳名の原則から、菊池と書かかれるようになったことは推察に難くない。

菊池城は平安時代になるといろいろと不吉な事件がおこった。まず文徳実録によると天安2年（853年）閏2月「丙辰、肥後国言す、菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」という奇怪な事件がおこった。そして「丁巳、又鳴る」とみえ、相ついで不可解な事件が重なっている。当時の菊池城院が現存する遺構のどこに比定しうるか明らかでないが、今後の研究課題として注目される。さらに大宰府の言上した報告によると、同年5月1日「肥後国菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」という三度目の怪事件がおこっている。そしてこれらの事件があたかも前兆をなすかのように「同城の不動倉十一宇火く」という記事をみるのである。おそらく今回調査の行なわれた米原部落の南側、通称長者原の一帯から出土する焼け瓦と火にかかった礎石、焼け米は、その時の火災を物語るものであろう。

さらに三代実録元慶3年（879年）3月16日丙午の条によると「肥後国菊池郡城院の兵庫の戸自ら鳴る」という記事がみえる。このばあいの「菊池郡城院」は一に「菊池郡城境」とも「菊池郡城垸」ともみえるが、おそらく菊池城院のことにはかわりなかろう。とにかくこうした一連の不吉な事件が相ついだ後、菊池城のことは永遠に史上から消えてしまうのである。そして城の所在地はもちろん、遺跡、遺構さえもわからないまでに忘れ去られてしまった。そして城のことが再び問題視され、考証されるようになるのは江戸時代後期以降のことである。その研究過程を略年譜風にたどつてみることにしよう。

（乙　益　重　隆）

長　者　原　全　景

3. 研 究 略 史

1、鞠智城についての研究文献は江戸後期になつてあらわれた。

渋江公正の「菊池風土記」には「文徳実録の天安二年菊池郡不動倉十一宇火あり」との記事を米原村長者屋敷に擬している。

2、桃源問答には「菊池の初代則隆以来の居城となつた深川の菊の城は、鞠智城の旧跡を取りしつらひて居城としたとも考えられるが、城家の居城であった木庭村も鞠智城の旧跡か」とも述べている。

3、「肥後国誌」は深川説を否として、鞠智城は兵庫や不動倉などをもっている官城であるので隈府、水島、米原の一帯にわたる広大な地域を占むるものであろうとみている。

4、明治になつて「大日本地名辞書」は「鞠智城を辺地の肥後国菊池郡に求めるのは、大野城を豊後国大野郡に求めるのと同じである」と笑っている。

5、昭和に入って大阪毎日新聞社熊本支局長であった中島秀雄氏は同紙上に「米原の要害こそ続日本紀天武天皇二年五月、大野、基肄城と共に繕治された鞠智城跡であろう。礎石の並ぶ山、多くの礎石が出た畑、焦米が層をなして埋っている畑、涼の御所、鳥ケ城　シヤカンドン、紀屋敷、宮床、馬洗淵、長者井などの地名がある」と報じている。

6、熊本地歴研究会は基肄城跡を踏査して米原における遺構と比較し、基肄城跡の研究者久保山善映氏や松尾禎作氏等も米原遺構を踏査して「長者の的石」は朝鮮式山城の城門礎であることを確めた。

7、坂本経堯はしばしば米原一帯の地形、遺構を踏査して、昭和12年８月「地歴研究第10篇第15号」に「鞠智城址に擬せられる米原遺跡に就て」さらに昭和17年７月「日本談義　通巻51号」に「鞠智城考」を発表した。

鞠智城の文献を集録して性格を考え、米原高台に登る東、南、西の城門礎、水門礎、長者山の礎石間尺、土塁線などは朝鮮式山城の規模に類し、焦米の多量の埋没は天安二年不動倉十一宇火くの史実を物語り、とくに土塁線は自然尾根を利用して外側を切落し、鞍部にのみ盛土した状態に注意し、さらに土塁線は米原台地縁辺だけでなく、これを内郭として塁線は頭合より木野丘陵を北に登って城北の谷をいだく外郭を形成することに注意した。

8、昭和13年城北村長松尾條規氏は城北村史蹟顕彰会会長となり鞠智城跡を調査し標木を建てて保護顕彰につとめた。

9、昭和28年10月　九州大学教授鏡山猛氏を中心とする九州文化総合研究所の大宰府、大野城、基肄城の調査の一連として「鞠智城跡の調査保護計画」をたてて県に陳情したが実現しなかった。

10　昭和28年11月　坂本経堯は熊本史学会に「鞠智城について」発表した。

11、昭和31年８月　国学院大学教授滝川政次郎氏を主査とする菊池古文化調査団は米原一帯の遺構を調査し、とくに長者山の礎石列を実測し、明治大学教授島田正郎氏は菊池市において「高勾麗国内城と鞠智城」について講演した。

12、昭和33年９月　熊本日日新聞社発行「熊本の歴史」に鞠智城跡を米原に求めて登載した。

13、昭和34年12月　熊本県教育委員会は「史跡伝鞠智城跡」として指定した。

（坂　本　経　堯）

4　古代山城の遺跡

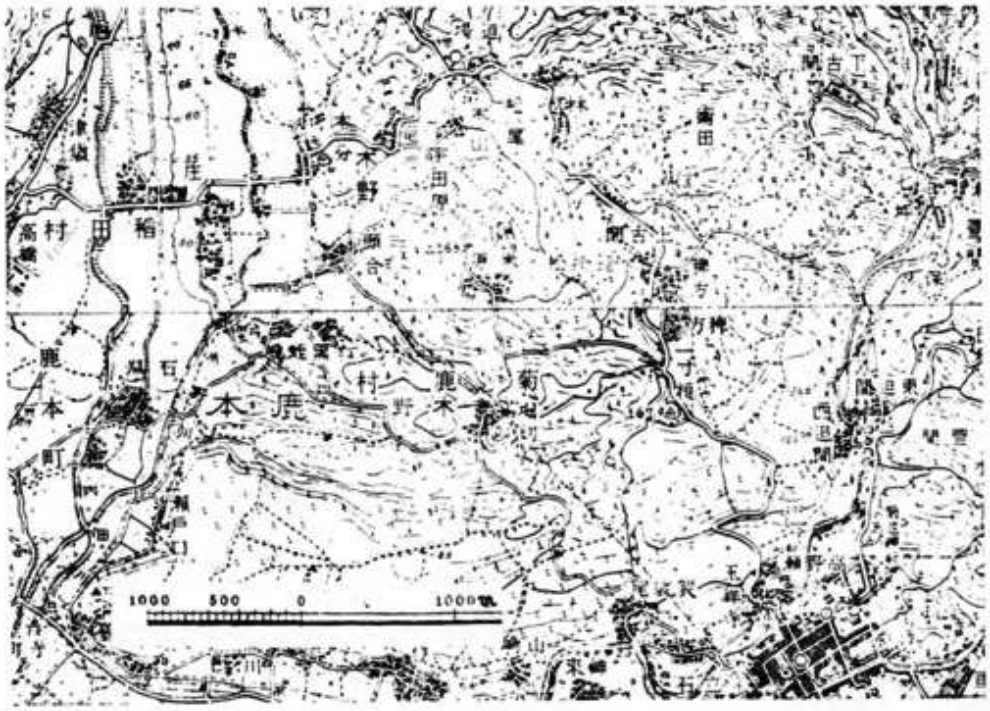
（1）　地理的位置

菊池・山鹿平野の北縁を限る連山の主峰、八方ヶ岳の西南麓には多くの小河川渓谷が入りくみ複雑な地形を形成する。中でも木野川の支流初田川流域の小盆地、およびその小支谷に面した米原の小盆地は、標高わずかに160m前後の高地にすぎないが、深く湾入した谷や急峻な崖線で区切られ、さながら天然の要塞を形成する。このような天然の地形をそのまま利用し、上代山城を築いたのが鞠智城で、その遺構は熊本県鹿本郡菊鹿町大字米原を中心に広く展開する。

（2）　遺跡・遺構の概要

鞠智城の遺構は従来多くの先学によって探索されてきたが、それらの位置や地名・内容については必ずしも正確に把握されたものばかりではなかった。しかし従来の知見と聞きこみによって知られている遺跡は概ね次の箇所をあげることができる。

まず建物礎石群の所在地についてのべると、米原部落内では人家の間をめぐっておびただしい花崗岩の礎石があるが、それらのほとんどが旧位置から移動している。また米原部落の南方、長者原の畑地帯



第2図　遺跡位置図

には、明治の頃まで礎石列が残っていたというが、耕作のじやまになるため埋めたり割ったりし、今では「長者どんの足形石」をはじめ数個が点在する。とくに昭和40年夏の開田工事には、多くの礎石が発見されたが、多くは庭職人に買いとられたという。また長者原の西端を限る高地を長者山とよぶ。この地は現在部落の共同墓地と雑木林、くぬぎ林からなり、建物の礎石列がみとめられる。礎石列は実測された結果軸心間隔7尺、南北5間、東西4間の建物4棟が東西に2棟、南北に2棟ずつならんでいたものと想定されている。眺望すぐれ、伝説によると「米原長者の御金蔵跡」とよばれる。また長者山の東麓、字宮野の畑からも古瓦が発見され、周辺に礎石列があったというが今では埋没して明らかでない。

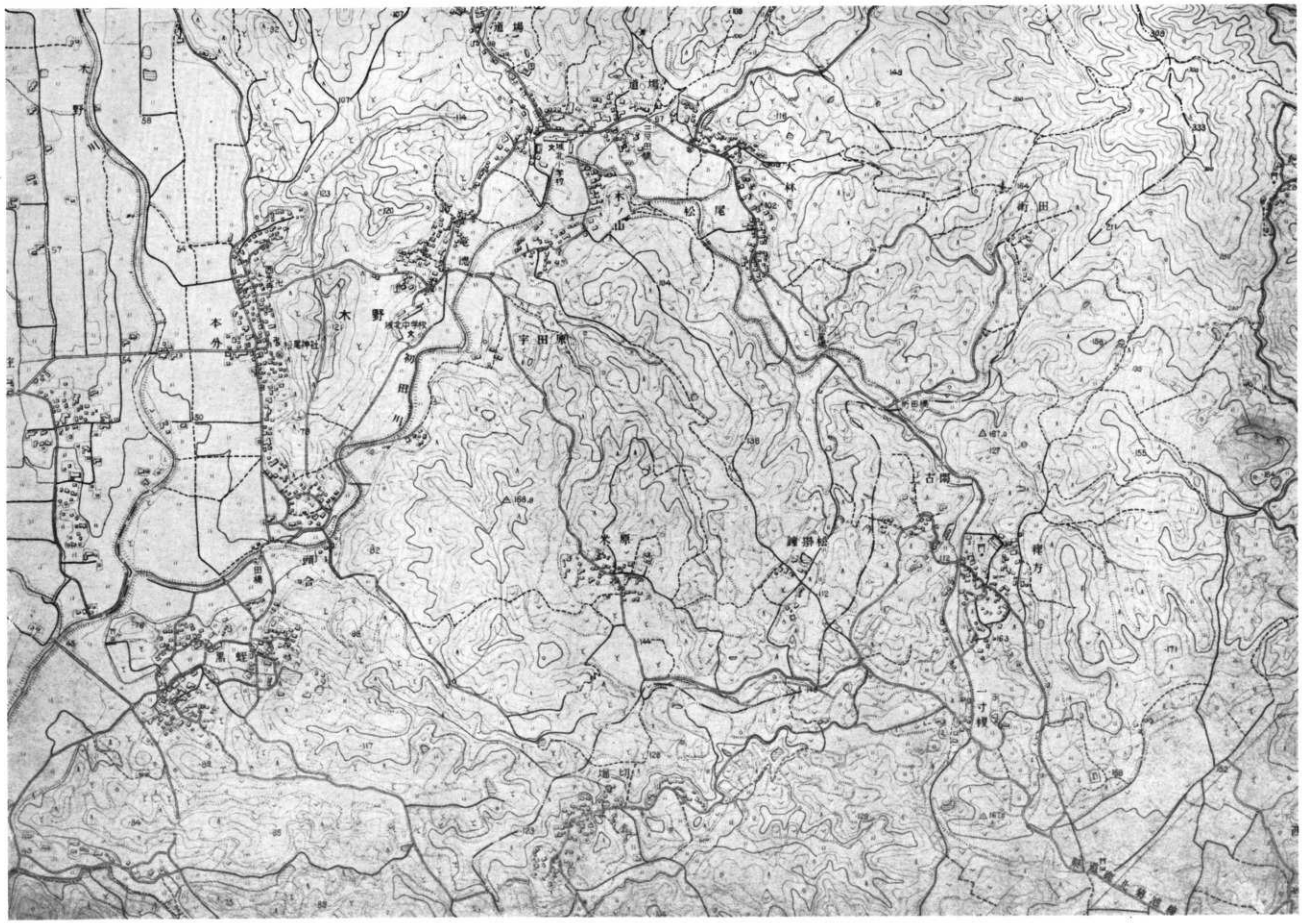
その他頭合(づごう)部落の宅地内には、もと並んだ状態で礎石群があり、田子山および頭合を起点として木野の丘陵を北にたどった土塁線の頂部にも礎石群があったというが、いずれも現存しない。

つぎに城門礎石とみられるホゾ穴のある石材についてのべると、まず米原部落の東南側、菊池市深迫には巨大な平石が畑の中に斜に埋まっている。その相対する礎石こそ現存しないが、おそらくこの地は鞠智城に出入する城門の一つであつたことがわかる。同様なホゾ穴のある門礎石は菊池市堀切より上りつめた旧道のほぼ中央部に埋没しており、これと相対する門礎石は現在堀切の木野神社の鳥居わきにすえられている。その他にも城門礎石は、黒蛭の谷から米原に上る道路わきの池ノ尾に1個残る。石材は深迫や堀切の例に比べるといちじるしく小さいが、ホゾ穴の大きさや形はまったく同じで、花崗岩を使用する。おそらくその相対する礎石は洪水などで流失埋没したのであろう。

鞠智城の外周を特色づける施設の一つに、山の尾根をめぐって延々とつらなる土塁線がある。その土塁は盛り土によって堤防状をなすものもあるが．多くは山の尾根の部分を連続的に加工したものである。すなわち山の尾根の、城外側を急崖に切り落して上面をならし、城内側には犬走り状の「車路」を設ける。このような土塁は福岡県大野城や、佐賀県基肄城などにしばしばみるところで、鞠智城の場合も同様である。現在土塁線のたどりうるのは、米原部落の西方を限る「長者山」および「灰塚」、「ススミの御所」、「佐官どん」の峰にわたる尾根、およびその支脈をなす「権現さん」の峰にわたってみとめられる。その他にも米原部落の南方菊池市の堀切より同市一寸榎にわたる崖線、黒蛭より池ノ尾方面にわたる崖線、木野川の沖積平野にのぞむ頭合部落や本分部落の背後を限る山の尾根などに、断続的にそれらしきものをみる。

以上のほかにも鞠智城の内外には、由緒ありげな地名や施設が各所に点在するが、その実態は明らかでない。すなわち米原部落内には「少監どん」、「紀屋敷（まつりやしき）」、「岩蔵山」、「長者井戸」その他の地名があり、米原西方の丘陵には「スズミの御所」の地名も存する。また黒蛭の谷には石垣を築いてつくった樋門があり、米原部落の南方「馬こかし」の難所には道路の片側を高い石垣で築く。さらに一寸榎に通じる「三枝」にも道路の側面を高く石垣で築いた所がある。もちろんこれらの樋門や石垣は構築手法からみて近世の所産と考えられるが、城の配置や周辺施設から考えて、何か由緒ありげに思われる。

とくに鞠智城の外郭は、米原部落を中心とする周辺約5キロ以内の地域に限られるか、それとも従来云われていたように道場・竜徳・頭合の背面をめぐる山の尾根づたいに、牛落しの谷をへだてて黒蛭・堀切を経て東北方金頭(きんがしら)の峯につらなる周囲約11キロの、ぼう大な外郭線によって構成されるかについては、今後の調査をまたねばならない。（坂　本　経　堯・乙　益　重　隆）



第3図　遺跡付近の地形図

（3） 池ノ尾の門礎石

鹿本郡菊鹿町本分から頭合を通って約66分の1のゆるい傾斜をのぼって 800mばかり行くと右手に池ノ尾の門礎石がある。（第5図）

北方から木野・頭合と続いて来た丘陵の稜線――鞠智城の外郭線であろうといわれるこの稜線が、方向をかえて急に西方に屈行する。その方向変換点にこの門礎石がある。西北方からの交通を遮断検問するにふさわしい地点である。

門礎石は雨水によってできた浅い谷の谷頭にある。花崗岩の風化した粗粒砂からなる地盤は侵蝕が激しく、調査時には地表下約50cmに埋没していた。

門礎石の周辺を掘開して地層を調査した結果赤色砂土、青色粘土、花崗岩砂土、灰色砂土、黒色砂土などが間に塊石をまじえて乱雑に堆積していることがわかった（第8図）このことから、門礎石の現在の地点は原位置から移動しているといわねばならない。原位置はおそらく現位置から谷の方向に約10mぐらいさかのぼった地点に想定される。というのは、その地点が谷をさかのぼった方向への傾斜変換線にあたっており、現在も畑の畦畔が1m近く高くなっていること、さらに後にのべるが、その点と西方稜線を結ぶ線上にめくら水門のあとではないかと思われる塊石、切石が埋没しているからである。

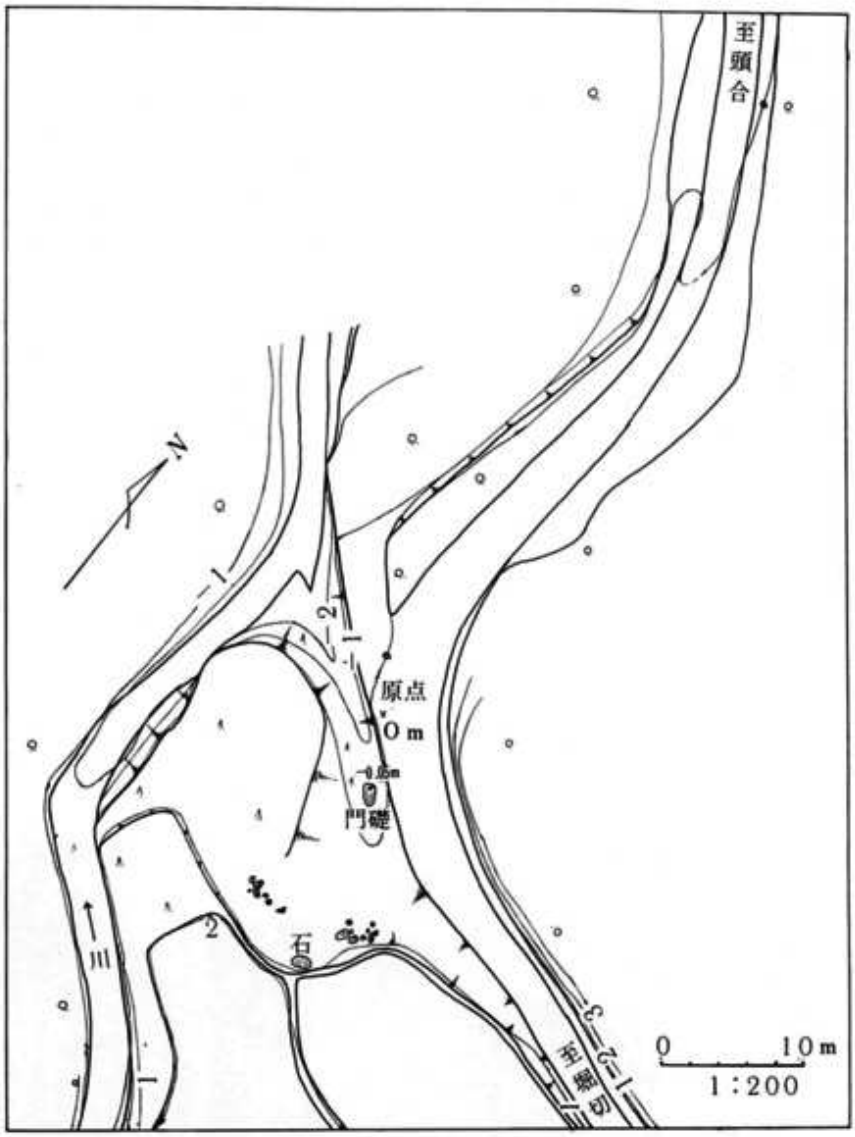
門礎石の岩質は花崗岩で、長軸が谷の方向にむかい、その平面形は長軸の長さ 1.43 m、短軸の長さ1.15mの卵形を示す。礎石表面長軸の北端から23cmの点を中心として直径17cm、深さ14cmの門のほぞ穴がある。（第7図）

ほぞ穴の内面は磨滅して平滑である。ほぞ穴の最深部は穴の中心をそれて北側によっている。ほぞ穴のふちの磨滅の程度も、穴のふちが一様に磨滅しないで南側の部分が磨滅がつよい。穴の底面に鉄銹がのこっている。門扉のほぞを受けるために鉄製の受け皿がおかれていたことを示すものである。①

現存する門礎石に対応する門礎石があと1基あるべきであると考え、原位置と推定される付近を掘開したが、遂にそれらしいものは発見できなかった。しかし掘開作業の途中、一定の範囲に塊石、切石があることに気付き一帯を掘開した。門礎石の周囲とおなじく流入した土砂が約50cmの厚さに被覆している。

土砂を除去するにつれて多数の塊石、切石が出てきた。その配列に石垣状の

第4図　池ノ尾遠景

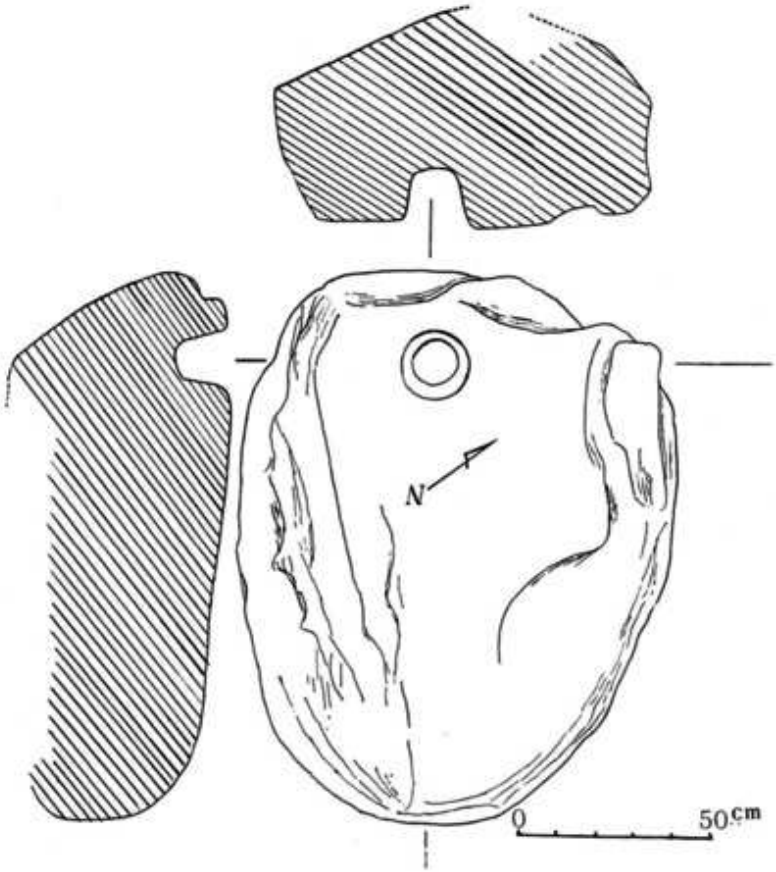


第5図　池ノ尾の門礎石周辺地形図

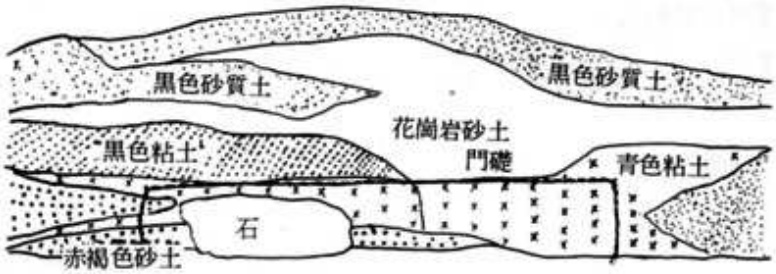
遺構が復原できないだろうか、また配列に一定の方向がもとめられないかなど、②細心の注意をもって掘開し測量したが遂に確認できず、今回の調査を打切り再び地中に埋没した。これらの塊石、切石のならびは石垣線をなす可能性がつよい。

註　①②九州大学教授鏡山猛氏の御教示をうけた。

第6図　池ノ尾の門礎石



第7図　池ノ尾の門礎石実測図



第8図　池ノ尾の門礎石付近土南側壁土層断面略図

（4）　堀切の門礎石

限府又は黒蛭方面から米原へ入ろうとする重要な通路の一つに堀切がある。読んで字のごとく米原を囲繞する山稜を堀りとおして道路を通じている。この調査に行った当初、泥熔岩の崖を 2 ～30*m*もの長さにうがってつくった隧道がいくつもあることが深く印象にのこっている。

堀切は高さ約 4 *m*の鞠智城の外郭線かと思われる稜線を道路幅 3.50*m*をもって切りとおして通路をつくっている。（第 9 図）この切り通した南側、米原から言えば稜線の外側に門礎石がある。はじめ崖にたてかけてあったが、あとで現在地に移転したという。調査時には流入した土砂におおわれて全くその所在がわからず、村民にたずね、おおよその見当をつけて掘開作業をはじめ、深さ 1.50*m*で、はじめてさがしあてたほどである。

門礎石は巨大な 1 枚石を用い、表面を削平して平滑にしている。平面形は長方形を基準とするが変形が著しい。石の長さは長軸線上で 2.66*m*、幅はもっとも広いところで 1.84*m*、石の厚さ約50*cm*～20*cm*を有し花崗岩である。（第11図）

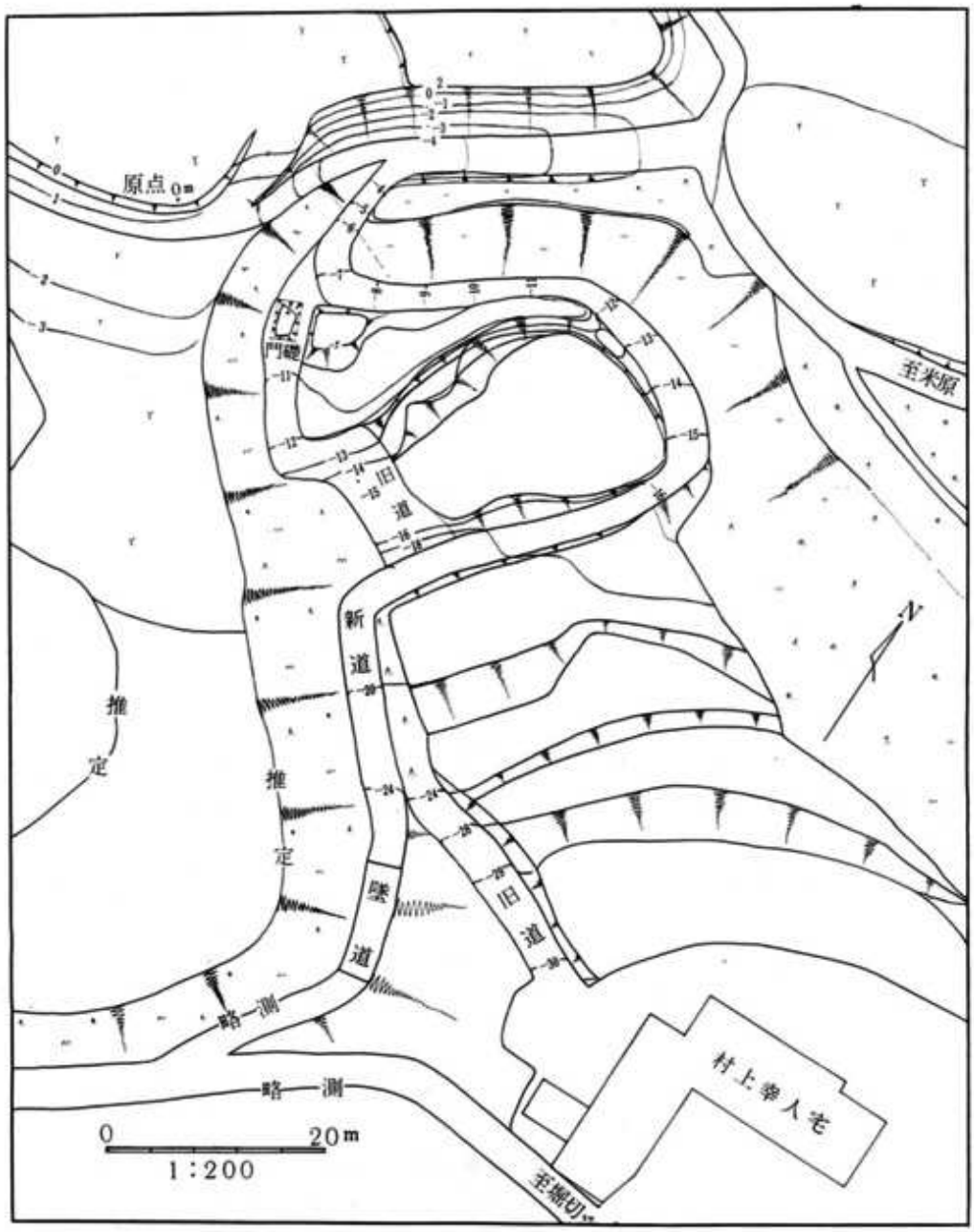
門礎石表面の長軸線上、一側に寄つて直径16*cm*、深さ15*cm*のほぞ穴をうがっている。穴は底部に近づくに従ってせまくなり底径10*cm*となる。穴の南側が磨滅の度が強い。穴の内壁、上線から約 5 *cm*さがったところに門扉廻転軸の受皿による茶褐色の鉄銹が残存している。

門礎石のほぞ穴に近い一側面約 40*cm*にわたって緩やかな弧状に欠ぎ取られ、磨研されている。おそらく門扉を支える掘立柱をたてたあとであろう。

おなじ堀切部落の木野神社石段下に礎石がもう 1 基ある。古老の話では50年ばかり前に堀切の門礎のあった場所からここに移転したといい、前記堀切の門礎石と一対をなすものである。

これを仮りに木野神社門礎石（第10図）と称する。

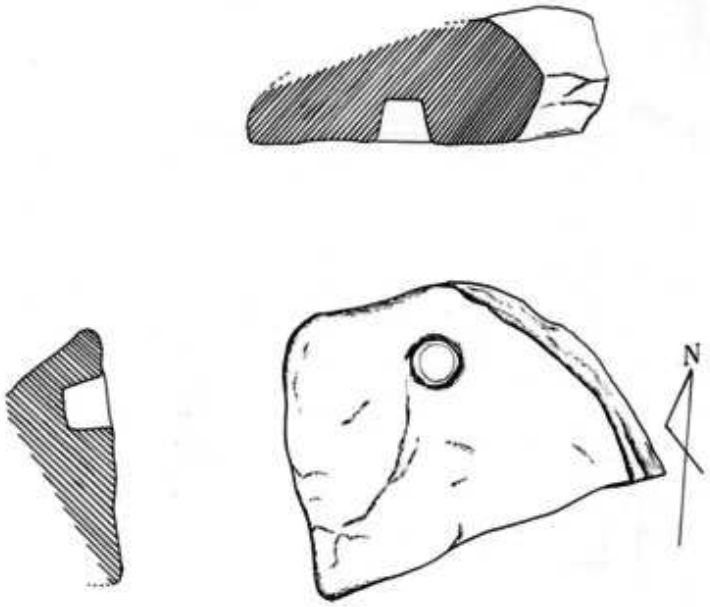
木野神社門礎石の平面形は長方形に近いが、それも多少変形している。石の全長は短軸線上で80*cm*、長軸のもっとも幅の広いところで1.04*m*を有する。石表面の北端から24*cm*の点を中心として直径10*cm*、深さ14*cm*のほぞ穴がある。堀切門礎石と同質の花崗岩で全体に10度傾いている。



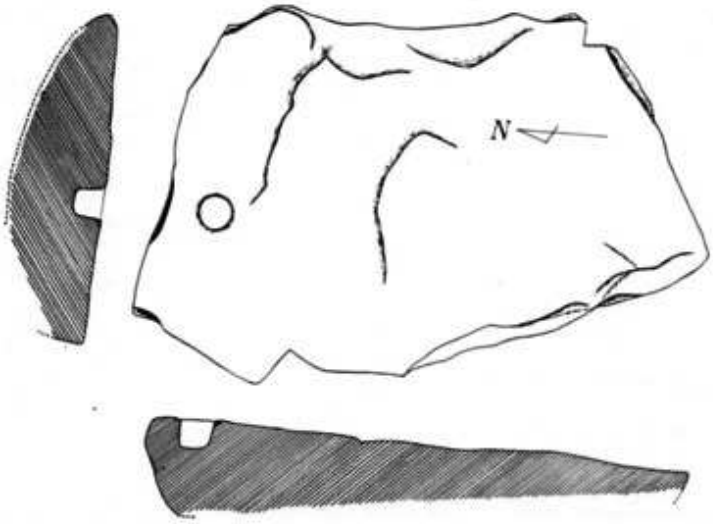
第9図　堀　切　地　形　図

調査終了後堀切門礎石と木野神社門礎石の実測図をつきあわせたところ、この2個の門礎石はほぞ穴を両端において、おのおのの石の端が接合することがわかった。もと同一の個体であったのが割截されて1個は原位置近くに残り他の1個は持ち去られて木野神社に運ばれたことが判明した。古老の話は必ずしも全部を尽くしていなかったけれども事実を伝えていたわけである。

（原　口　長　之）



第10図　木野神社の門礎石約1／25大



第11図　堀切の門礎石約1／38大

第12図　堀切の遠景

第13図　堀切の門礎石

第14図　木野神社の門礎石

（5） 深迫の門礎石

門礎石を中心とする遺跡は、鞠智城全域からみればほぼ東南に位置し、行政的には菊池市深迫に属する。古くから「長者ドンの的石」とよばれる巨大な門礎石が、谷頭近くの畠地の崖面近くに半ば傾斜し、埋もれかけている。(15図) 本期間の調査目的を

① 深迫遺跡の地形測量（$\frac{1}{200}$）

② 礎石の実測をかねて、その埋没状況を知るために、礎石に接してトレンチを入れる。

の２点にしぼって調査した。以下調査所見の内、重要と考えるものを、箇条書きに列挙して記載する。

門礎石 (17、18図)

1、この門礎石については、背後の崖上から転落したとも従来云われ、かつそのようなことを推定させる地形でもあるが、この考え方は今回の発掘の結果からは否定される。

2、トレンチ断面の所見によれば、旧地主の萩尾氏が約30年前、この石を移動させる目的で掘った穴が明かに認められ、それ以外には層序の攪乱は全く認められなかつた。

3、なお、門礎石の下位及びそれと同一のレベルの層には、布目瓦の破片、石塊、鉄釘、炭化物などが伴出した。

4、現在門礎石の傾斜するのは、除去の目的で根石を抜きとり、反対側から持ちおこしかけた傾斜と考えるのが、合理性のある考え方であろう。

5、したがって礎石は多少の傾斜はあっても、原位置に近い位置にあると考える。

6、石質は花崗岩（当地方ではコメ石という）で、その寸法は長径2.68m、短径2.26m、厚さ約80cm以

第15図 深迫の門礎石周辺

上を測り、上面はことさらに加工した痕跡はないが、概ね平滑面を呈する。一側に偏して円形の枘穴が穿たれているが、仔細に見ると、二段にえぐられかつ完全な同心円になっておらず偏っている。また枘穴内部を観察すると使用による磨滅面は西側がもっとも強い。このことは回転方向に関連する。寸法は下記のごとくであるが、この寸法は池ノ尾所在の門礎石の枘穴の寸法に近似するようである。さらに枘穴のある側の礎石の縁が明瞭なえぐりではないが、浅い不整形のカーブをもっている。枘穴寸法　深さ14㎝（約4寸6分）　短径18㎝（約5寸9分）長径20㎝（約6寸6分）。

7、門扉の柱根につくられた出枘を、枘穴に嵌入して門扉が廻転する式の、枘穴礎石に属するが、枘穴内には堀切門礎石で認められたような、軸受けの機能をもつ鋳鉄の受皿があったような痕跡はない。

8、廻転の方向を示唆するのは6でのべた枘穴内面の磨滅程度の差異が西側においてより著しいことから、門扉が後に開く「内開」の門扉であったことを推定させる。

9、対称位置に同様の礎石があるのか否か、片袖式の門扉なのかについては、それを検出するために、トレンチを拡大したのでその項でのべる。

拡大トレンチ（20図）

門礎石より南に上記の問題を解決するためにトレンチを拡大した。その結果トレンチ内においては対称をなす門礎石（西礎石）はなかつた。但し発掘面積が狭少であるため、結論については、次年度の調査まで留保したい。また門礎石より東側についても、全く鍬を入れなかったので、同様に留保したい。以下拡大トレンチについての所見をのべる。

1、枘穴の中央より南に約 5.8m（唐尺19尺）余の地点に、礎石をぬいたあとの根石群とでも称すべき長径約20㎝余の石群を発見、石質は花崗岩であるが、凝灰岩も1箇ある。（現地表より－60㎝の深

（北側から望む）

第16図　深　迫　の　地　形　図

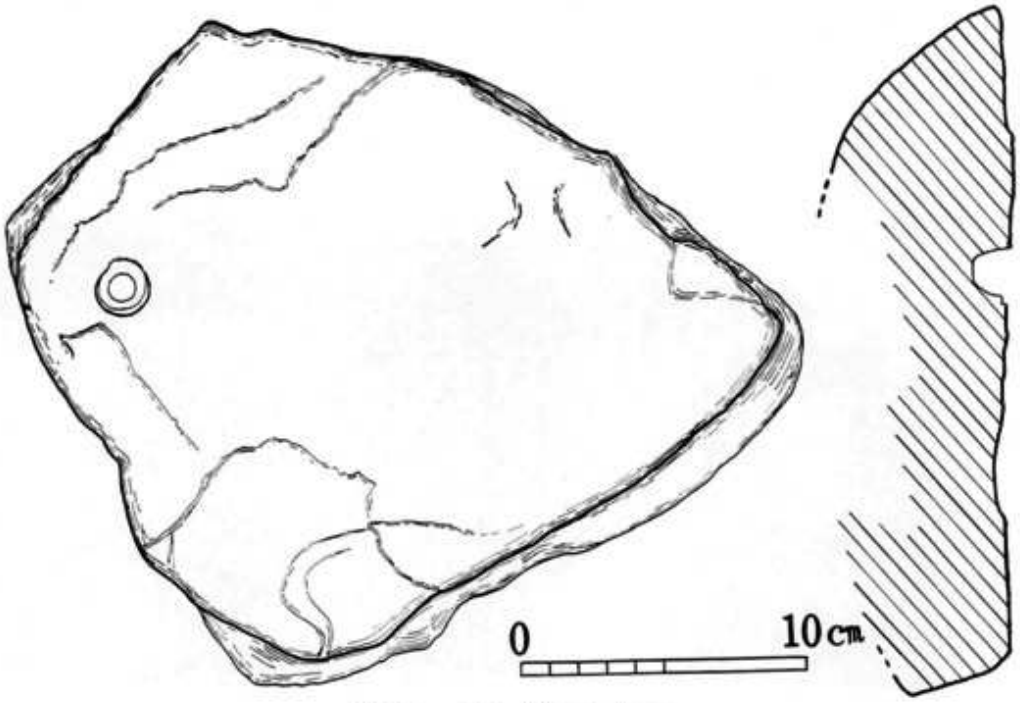
さである。）石群の周囲と下位には、黒色土を認める。あたかも穴を穿った際に嵌入する上層の土のような印象を与える。石を抜いた穴は現存長径約 1.2mを測るが、これは上位は削平されいてるので、上位の径はこの数値よりもさらに大きいことが考えられる。

2、門礎石と根石群と考えられる石群との間は、後代のいも穴や背後崖面からせり出した土などを別にすると、概ねピンクがかった硬い粘土である。これは人為的な盛土ではない。幅 3.6m（12尺）但し内法を測る。

3、上記2のピンク色の粘土の地山の東西断面は中央部がわずかではあるがやや高く平坦である。南北断面は門外、つまり谷の方にやや低く傾斜し、黒土をかぶっている。これらの点は自然の地形にも合致している。

4、この地山面には幅12cm程度で長さ20cmの礫がくいこみ凝灰岩の

第17図　深 迫 の 門 礎 石



第18図　深迫の門礎石の実測図

細片や土師質の細片がみられる。

5、1の石群に近く、直径40㎝、深さ34～40㎝のピットが検出された。このピットは周囲の土と識別はかなり困難で、ただ硬度を異にする。内部から遺物は検出されていない。

測量における所見

1、谷頭近く位置する礎石の、相対する谷（迫）はさほど大きい方ではない。開口部近くの県道まで約300m位である。けれどもその勾配はかなり急で、現在でも六の段崖が形成されている。深迫の城門に達する道路を考えた場合、往時はたとえ距離はみじかくとも、かなりの坂道であったと考えてよいのではあるまいか。

2、ことに門をくぐって、城内に入ってからは、現在地形のままでは普通の方法では登れない程の崖である。これは谷頭から土をせり出して開いた段畑が各所にあるからである。門礎石の位置から城内と推定される、比較的平坦部まで50数mの距離を上るには、どうしてもひどい坂道を登るかまたは曲折の多い道路を通るほかない。

3、近距離でかつ勾配の急な道を通つたとすれば「階段」を設けるという特別な施設がまず考えられる。現地形においてそれを示唆するかのような「はり出し」が礎石の下の崖面に1箇所、上位に3箇所。これらを当時の階段の痕跡と認められないだろうか。勿論これらは崖面を縦断せねば確言で

第19図　深迫の門礎石周辺

第20図　深迫の門礎石周辺トレンチ

きないことで、決して断定するのではないが、われわれは上記のような想定を今年度の調査時に考えたのであえて記録しておく。

4、この想定をたすけるのは拡大トレンチ所見1・2・3でのべた、硬い地山で、これは両門礎石の間の、路面を物語るものではあるまいか。

5、深迫の城門に到達するまでの道路についても、中央。右より。左よりなどのルートがあろう。何れであるかについては、憶測する資料はあっても、その証拠はない。上記のことがらとともに次年度

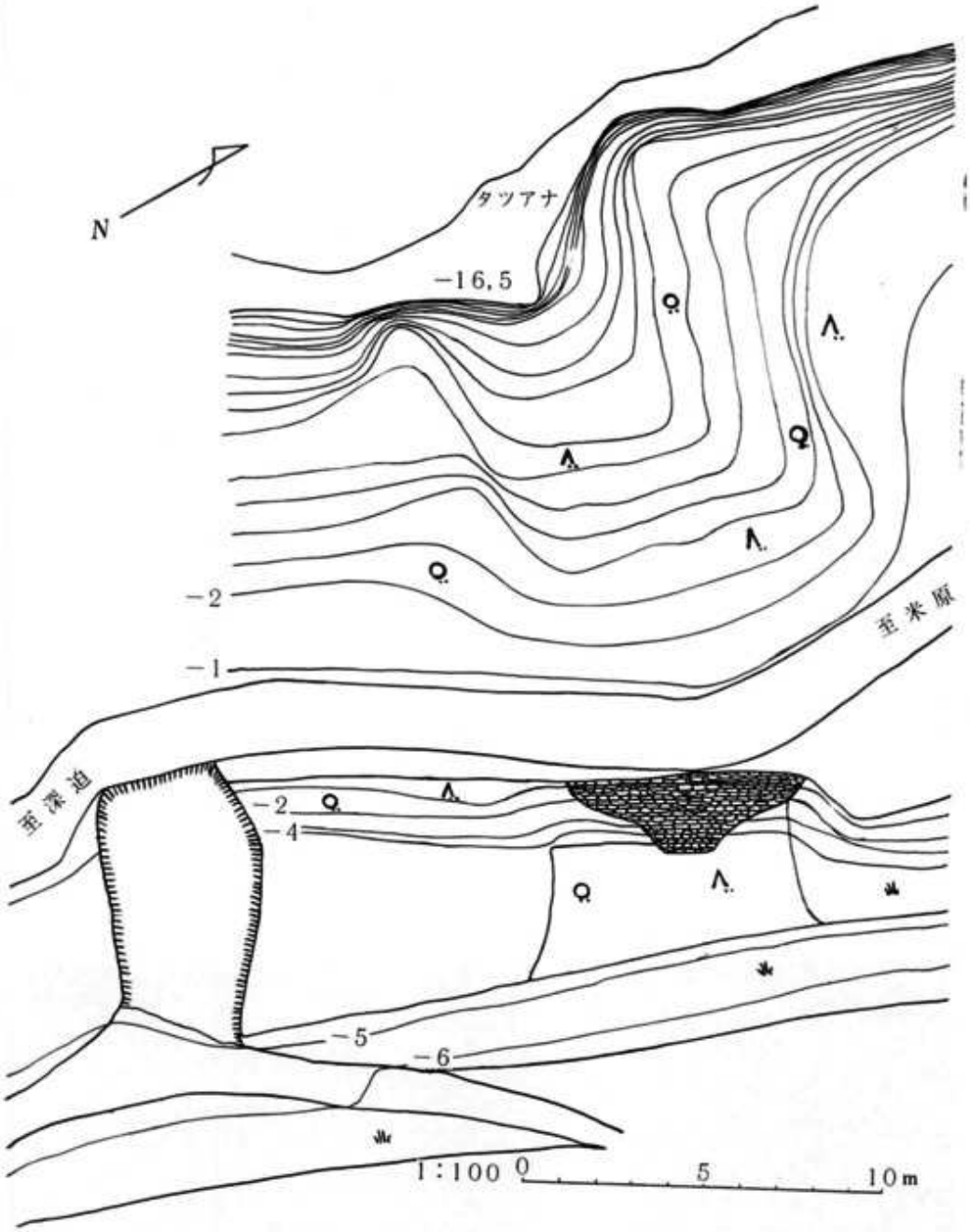
（南側から望む）

の課題である。

最後に、上記各項を要約すると、拡大トレンチにおいて検出した根石群は、西側門礎石の抜きとられた跡で、両礎石の間の硬い地山は当時の路面で、しかも前記のごとき勾配をもつ。しかしてピットは両礎石に附属する柱の穴であろうか。東礎石は枘穴礎石で内扉は後開きであろう。　（三　島　格）

註　坂本経堯「鞠智城址に擬せられる米原遺跡に就て」地歴研究　1937年　熊本　県地歴研究会刊

第21図　馬こかし遠景



第22図　馬こかし地形図

（6） 馬こかしの道

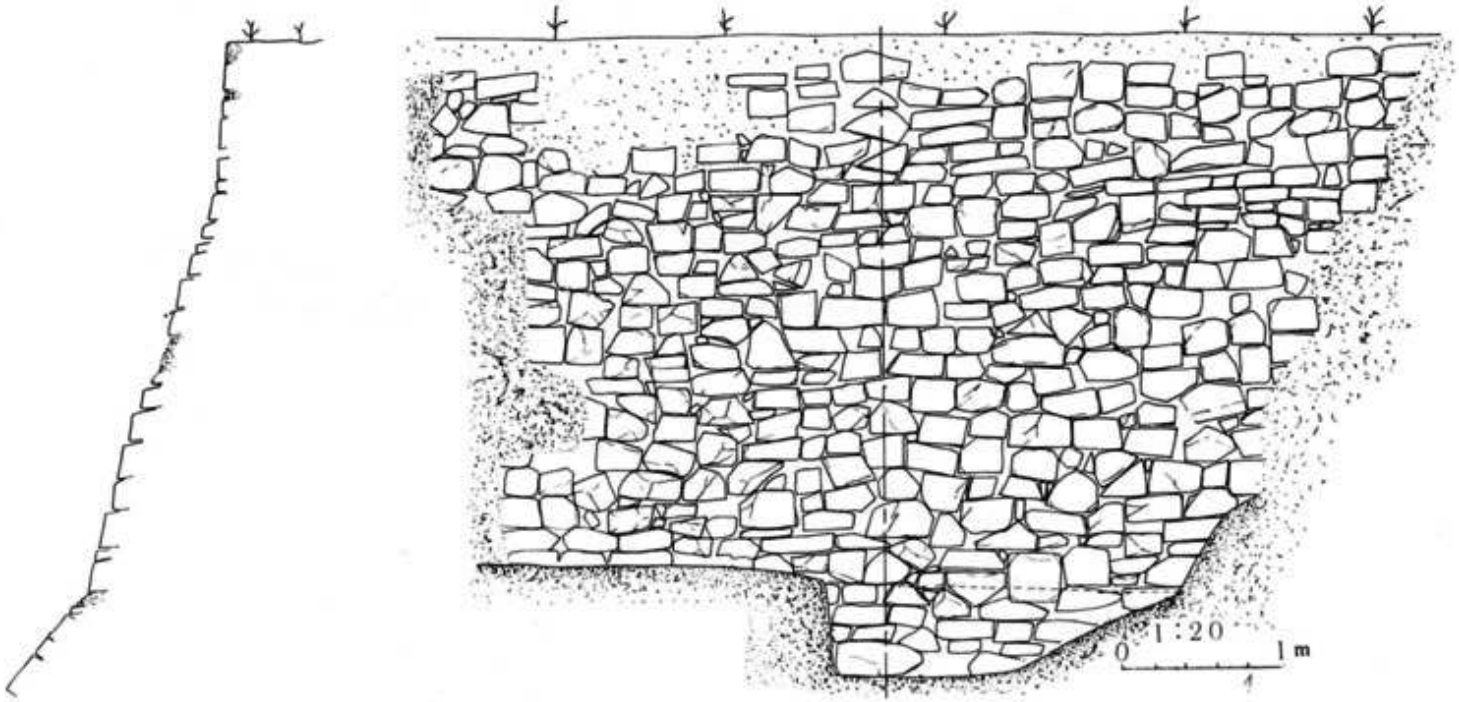
深迫門礎から米原に進む場合どうしても通らねばならない通路がこの〝馬こかし〟である。この地点は通路が急にせまくなり要衝の地といえる。現在東側は水田が湾入し、西側は軟弱な凝灰岩を鋭くえぐった自然の崖になっている。この馬こかしの通路は坂本経堯氏の記憶によると、昭和初年には非常にせまくて丸太棒を渡してあり、現存する東側の石墨については草木が繁っていてよく分らなかったとのことである。しかし地元の老人の話では石墨を築いた記憶もなければ、祖先が築いたという言い伝えも残っていない。したがって石墨の築造時期は分らないにしてもかなり古い築造であることがいえる。

さて石墨は先述のとおりこの通路の東側にのみ認められる。その規模は長さ約6.6m、高さは約4.3mまで確認できる。傾斜は断面図に示すように非常に急勾配で、上から約2mまではややそり気味であるが、その下約 3.8mまでは幾分ふくらみをもち、それ以下は根固め状に裾を広げている。石材はほとんど凝灰岩を加工して使用し、一部に安山岩質のものを認める。石墨の築造状態はほぼ長さ30〜60cm、厚さ10〜30cmの切石をほとんど水平に積みあげ、すき間には小形の石をつめこんでいる。なお石墨の奥行きについてはその深さ、形状ともに不明である。

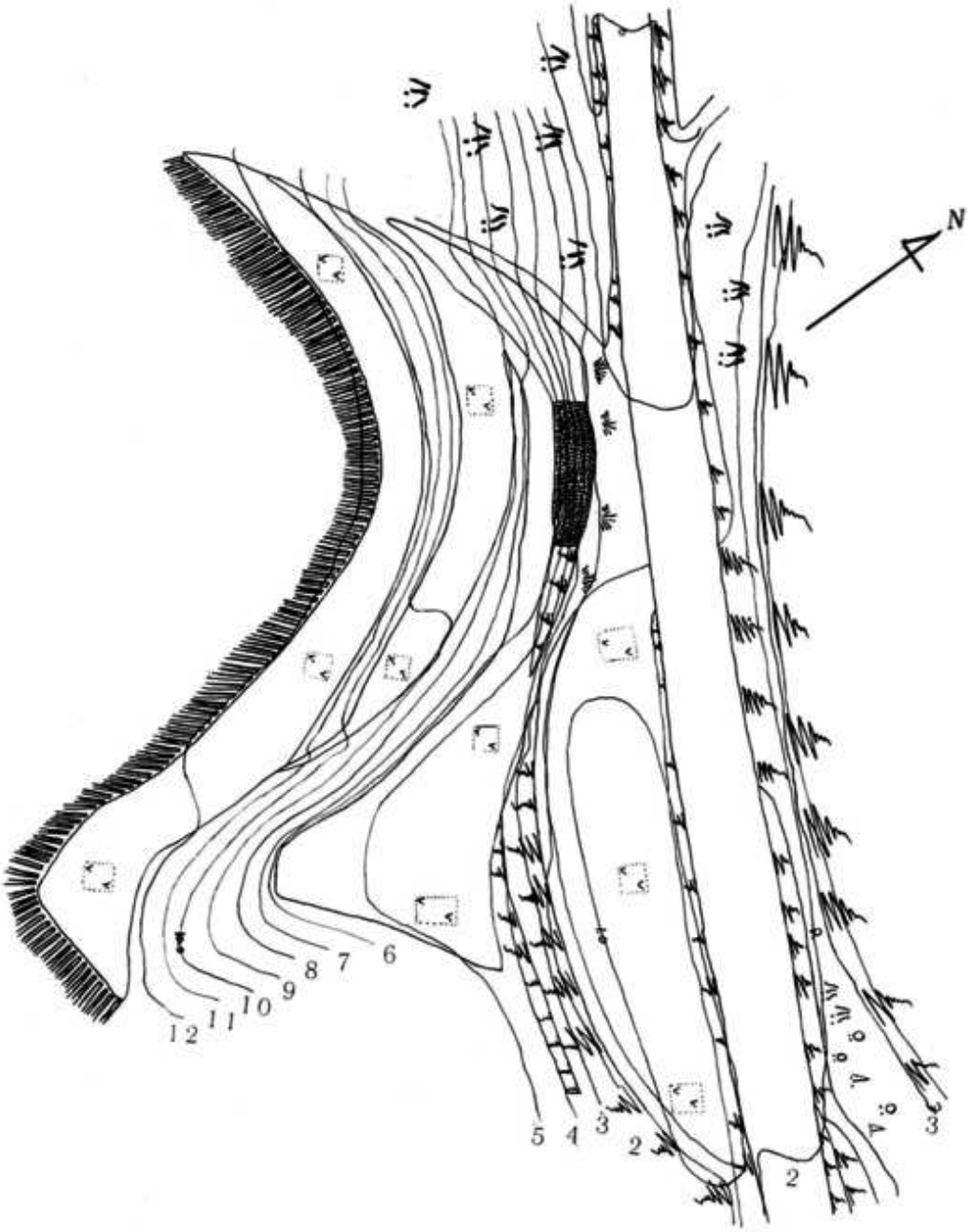
石墨の裏に当たる西側の崖は目のくらむような急傾斜で、水平距離にしておよそ10mで12mの落差があり、さらにそこからはほとんど切り立ったようになっていて、道路面との比高16.5mを計る。崖の最深部は俗に「タツアナ」と呼ばれており、降雨のときは流路となる。タツアナから上を見上げると、凝灰岩の浸蝕崖がちようど屏風のように切り立ち、その間からわずかに空が見えるといつた感じである。

（隈　　昭　志）

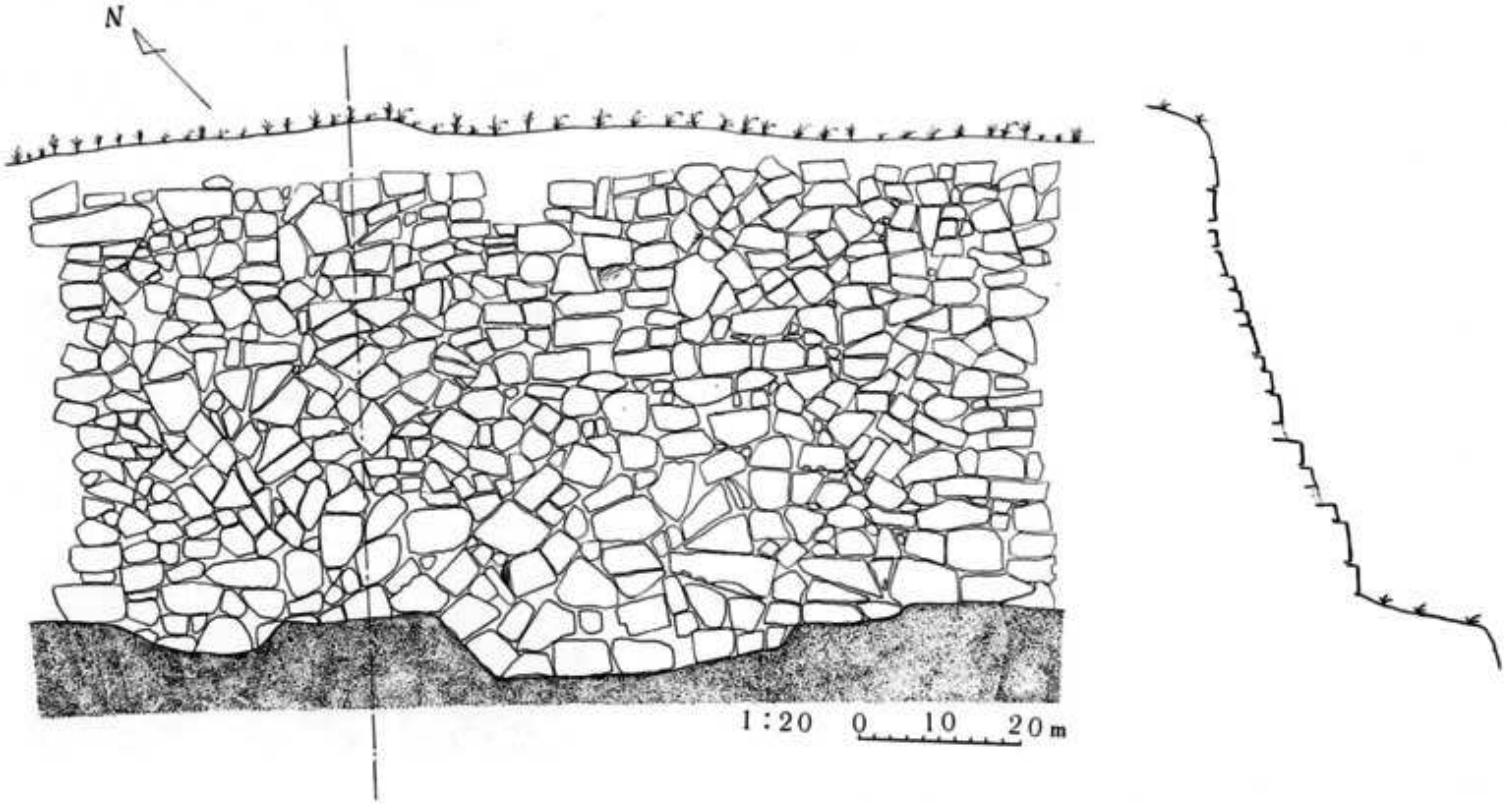
第23図　馬こかし石垣



第24図　馬こかしの石垣実測図



第25図　三枝石垣地形図



第26図　三枝石垣実測図

（7） 三枝（みつえだ）の石垣

三枝石垣は米原・一寸榎方面をむすぶ道路筋に在る。米原台地の南側北崖にそって道路は連なる。石垣付近の地形（25図）は、東西に走る道路の南、北側がかなり急な崖線をなす。

石垣は道路の南面に位置する、道路をはさんだ北側崖には石垣は認められない。しかし、崖の基部に数段にわたって石垣を築いている。

石垣についてのべると（26図）その長さは約8.30*m*。高さ約4.30*m*。中央部の傾斜は約75度を有する。石垣は15段～20段形成されている。石材はほとんど凝灰岩で大きさ約50*cm*×70*cm*の切石を用いている。

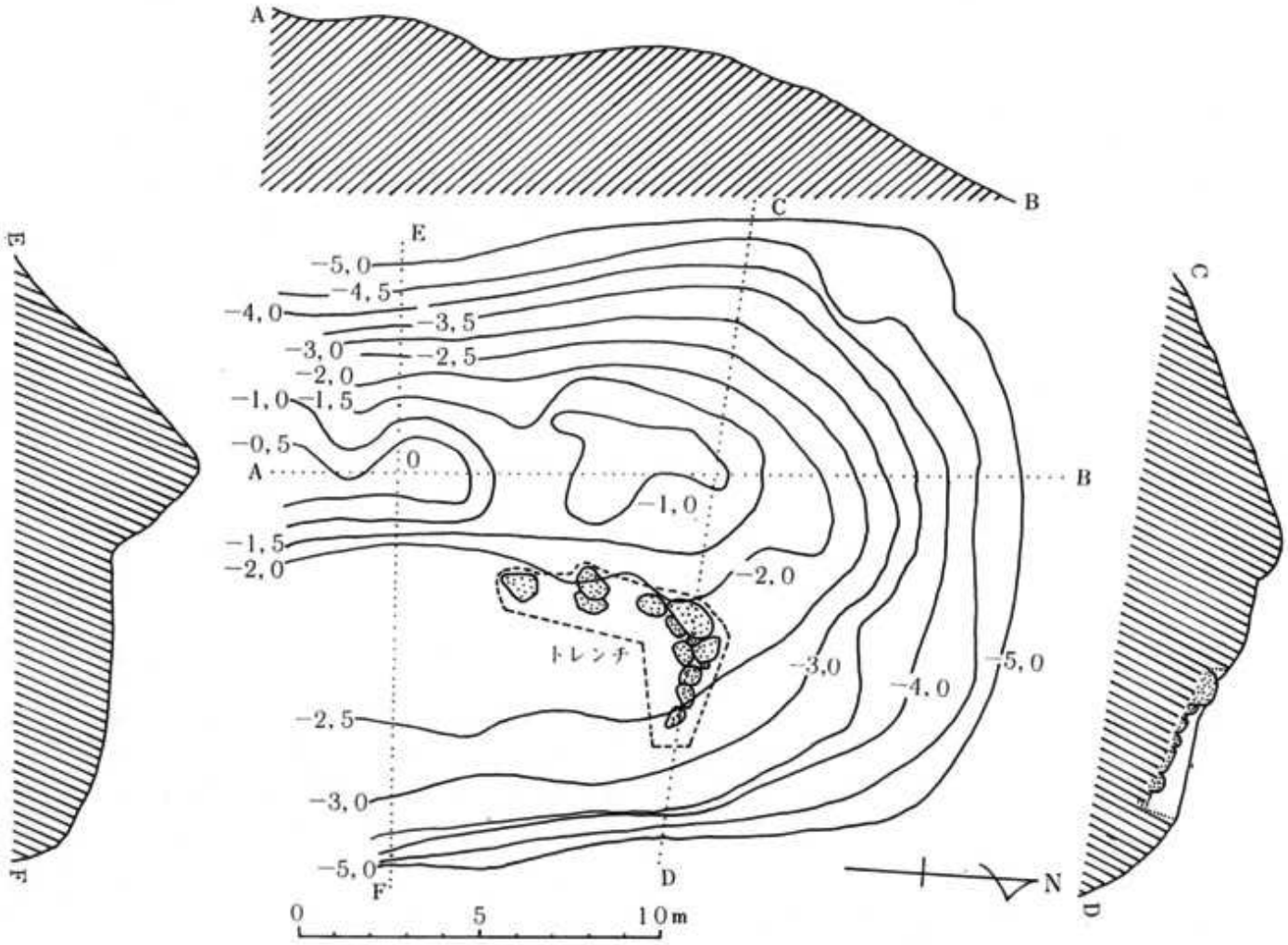
石垣上部の二段は下部の築造と異り石材は同質であるが、切石を用いて上面を水平に保ち、全体に安定感がある。とにかくこの部分は後世補強したものであろうか。最下部の石垣の築造にあたつては比較的大きな切石を用いて赤土層にくいこませている。

石垣の築造にあたっては空隙の充塡に意がそそがれ、切石間の間隙には不定形ではあるが、断面の平らな石材で補強している。

全般的に築造に当っては、 ⌒ 形を呈し、つまり下石は左斜めにおかれ、上石は右斜されている。上石が右に落ちようとする力を下石の支点が左側におかれている。このような「組み方」は一般に「右きき」の人の手法に多いという。石組みの一部に ⊓ 型状を呈した矢を打ちこんだ痕とみられるものも認められた。

石垣を中心とする附近から遺物の発見はなかった。　　（杉　村　彰　一）

第27図　三　枝　石　垣



第28図　佐官どん地形図

（8） 佐　官　ど　ん

米原部落の西方には長者山、および団子冷しの峠・灰塚・ススミノ御所など、一連の峰が北にむかってのびている。これらの連峰には土塁線と車道が延々として構築されている。その最北端の峰にある平坦部が「佐官どん」である。

この地は従来注意されたことがなかったが、今回の調査にあたって「佐官どん」という呼称と、この地方で米石と称している花崗岩が数個露出しているという聞き込みがあったので、現地を踏査したところ、果して礎石群の堆積を発見した。しかも露出している石材には一定の秩序がみとめられたので、新たに調査地区に加えた。

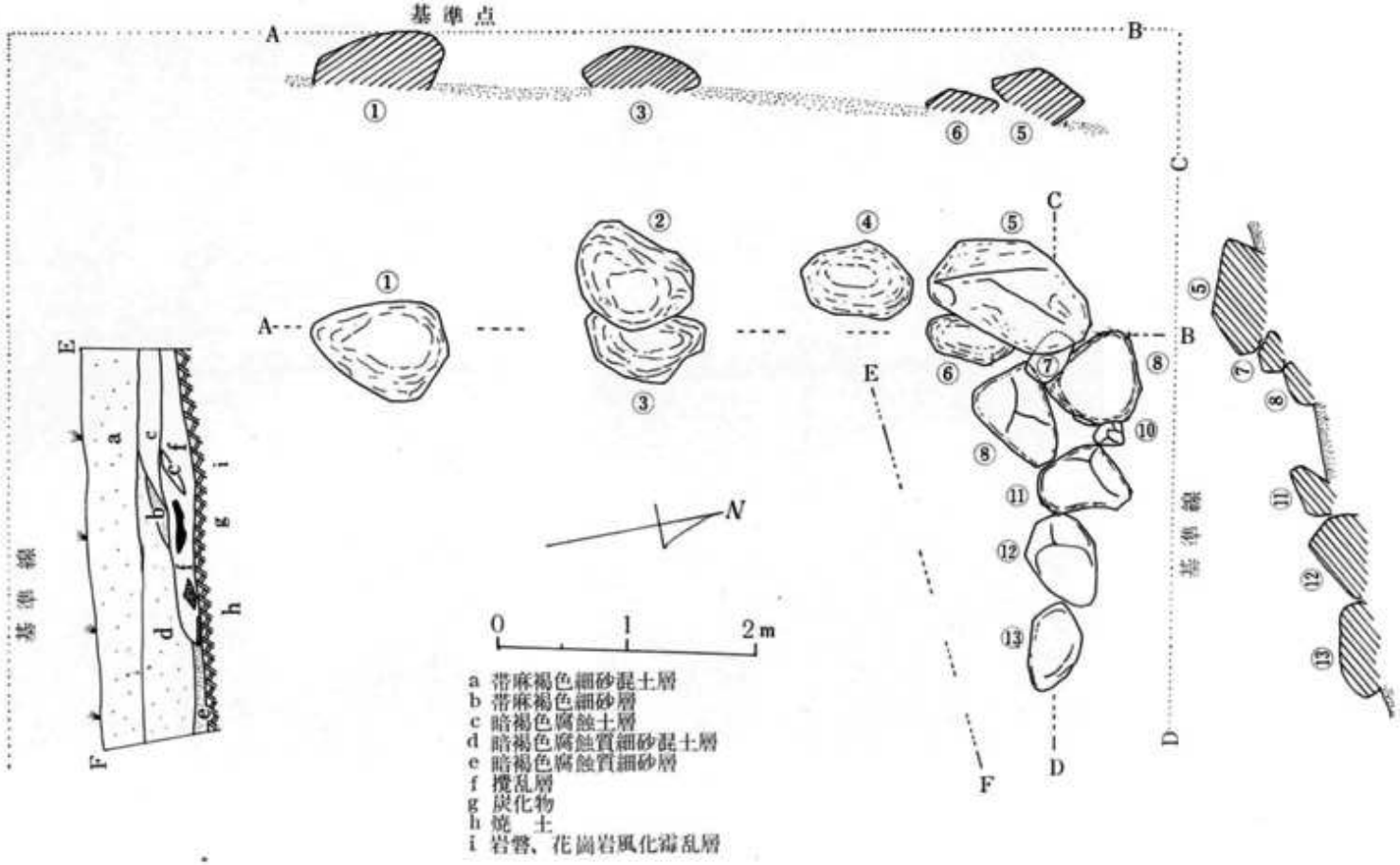
令の制度によると、佐官どんとは官吏四等官のうちの「サクワン」と同音で、しかも鞠智城の中心部と考えられる米原の部落の中には「ショウゲンどん」という地名が残っているところから、大宰府職名としての少監や、大・小典の名称を思わせる由緒ありげな地名には少なからず心をひかされた。

調査にかかってみると、露出している礎石の１号から５号までのうち、２号以下は移動したものであることが、形状・レベル・柱間などから容易に推察された。１号はかなり安定しており、或は移動していないかも知れないので、これを基準に長さ１ｍのステッキボーリングをもって礎石や根石の埋没状況を探査したが、５号から東へ石の堆積があることを知りえたほかは何の手がかりもなかった。建築用地として残された平面も幅10m内外という狭い面積であるし、土も軟らかであって、１号のレベルを基準として考える場合、探査洩れはないつもりである。

従って５号から東へトレンチを掘開し、埋没している石を露出していった。その結果13号までの石群を発見したが、７・10号は根石程度の石である。しかし、これらの石群はもしかすると自然堆積であるかも知れないので、発掘途中注意していたところ石群の間から、かなりの量の炭化物や焼土が発見され、人間生活の痕跡が濃厚にみとめられた。

土層断面図ＥＦは石列より約１ｍ南寄りのトレンチ南壁のもので、同種の土層は地形に即して北へ傾いているので、石列（11号～13号）はＦの攪乱層の中にあることを確認した。この土層図から考察すると、まず岩磐の上に攪乱層があり、その中に石列・炭化物・焼土が共存するという点が注目される。石列の堆積状況からして、この礎石は原位置を離れ、地面の傾斜に沿って押し転がされた状態と考えられる。しかし、その時期がいつであったかは、土器などを包含していないので不明であり、埋没された原因もわからない。その後Ｃ層・Ｅ層、次いでＦ層、次にＢ層、最後にＡ層が堆積しているが、それらは西側の土塁が崩れていったものと思われる。

もし、攪乱層が想定される建造物一帯の広さにわたって存在し、その層の高さに礎石があるということも考えられるが、１号～８号の礎石を上に押し上げることは現実には困難であろう。むしろ、礎石が



第29図　佐官どん礎石群堆積図

存在した面は1号の存在する現在の地表面からそう深いものとは思えない。そうだとすれば開墾か何かの理由によって礎石を隅に片付けたのであろう。開墾とすれば地下80cmも堀って埋める必要はない。もっと浅くてよいはずであり、それも石を落し込むに足る土壙だけで充分と思われる。然るに石列より1mも南へ離れたEF線にまで攪乱層のF層が存在するということは、石を転がす時少くともEF線より北側に広く窪地があったことを示している。しかも礎石が岩盤に直接接していて間層を持たないことからみて、石を転がした時期は新しくないと考えられる。

第30図　佐官どん全景

第31図　佐官どん礎石状態

このように考えてくると、開墾による埋没も否定されるべきであって、他の理由を考えねばなるまい。むしろ建造物が現在の地表に近い高さに存在し、西は土塁で保護され、東は深い切落しになっていて、北が手薄であり、しかも最北端の位置などからすると、建造物の北側は当初から岩磐の深さまで切落しになっていたとは考えられまいか。この場合なら、この建造物の焼失後、礎石を転ばせて落せばこのような状態になろう。しかし普通礎石は後世まで原位置に残存するのが例であり、古く礎石を落し込む必要があったかは疑問である。また北端における切落しを証明するためには、南北にトレンチを入れてF層がなくなる線すなわち切落し線を確認する必要があろう。

ともかく現存する11個の礎石群は、土塁線の最北端に当るこの地に、建造物があったことを示しているのである。

この地に立てば、北麓の木山から西へ竜徳・頭合をまじかに見ることができる。崖線の切落しが深く地形的にみても要害の地であることがうかがわれる。

尚、土塁線を南にたどれば、約30mほどのところに、花崗岩が4個露出しており、史蹟顕彰会の標木が立っている。更にこれより約13m南にたどると、西へ数m入ったあたりに標高 168.9mの三角点がある。

（田　辺　哲　夫）

（9）　米原部落内の礎石群

鞠智城の中心部をなしたと推定される米原部落内は、古くから集落に占拠され、城内遺構のほとんどが失なわれている。今わずかに残るもとからの礎石群や、由緒ありげな地名・伝承などについてのべると次のようなものがある。

まず人家のまわりに寄せあつめ、または積まれた礎石群についてのべると、それらの石材はほとんど花崗岩の自然石を用い、部落民はこれをコメイシとよんでいる。その他にも礎石にはわずかではあるが安山岩の自然石が用いられ、部落ではこれをアワイシとよぶ。これらのコメイシやアワイシからなる礎石群は、現在地表に露出しているものだけでも50個以上の多数にのぼるが、旧態の配置を存するものは皆無に近い。わずかに原田成一氏宅地内に残る花崗岩の礎石2個と、礎石を掘り取った痕跡は有力な手がかりとなるもので、建物の柱間間隔7尺を有したことがわかる。建物は何間何面であったか明らかでないが、主軸が南北に長い長方形の配置が想定される。

その他にも部落のほぼ中央、米岡佐吉氏宅地の東端に1個と、部落の西北端米岡運喜氏宅の庭先と桑畑に各1個、花崗岩の礎石が残っているが、これだけで建物の配置を復原することは困難である。礎石の多くは火にかかった形跡をみとめるが、瓦はほとんど見当らない。おそらく部落内にあった当時の建物群は、谷に面した平坦部を利用し、主軸が南北にむかう一定の規格をもって配置されたのではないかと推定される。

(10)　少監どん・紀屋敷（まつりやしき）

米原部落内には今でも由緒ありげな地名を存するが、それらの来歴は明らかでない。まず部落の東南隅、原田康憲氏宅地のつづきには、深い谷にのぞむ約80平方mの凹地があり、部落ではこの地を「少監どん」とよんでいる。その理由には何の伝承もない。現地は西方と南方に一段高い（高さ約1.50m）桑畑によってかこまれ、東側は高さ約10m以上におよぶ急峻な崖になっている。表面調査の結果、ヘラ目のある古瓦一片を採取したが、それだけでは年代判定の対象にならない。礎石その他遺構らしいものは何もなく、およそ部落内の最もせまい片隅に、このような由緒ありげな地名を存すること自体に疑念を生じる。

ちなみに大宰府の官制には長官としての帥をはじめ（権帥をあてることもある）大弐・少弐・大監・少監・大判事・大典・小判事・大工・主神など、特有な制度があった。中でも少監は従六位上相当官で、奈良時代頃までは中央政府から来任したが、平安時代の終り近くなると土豪などが歴任し、しかも定員を上まわって10数名も就任することがあった。鞠智城米原部落の一隅に、たまたま「少監どん」の地名を存することは、たとえその由緒がわからないとはいえ、先にのべた米原の西北方に位する「佐官どん」の遺構とともに注意すべきであろう。或は推察するに鞠智城の城主は少監の位にある者を任じたのであろうか。それとも米原に住んでいた土豪が、たまたま少監に任ぜられたのであろうか。いずれにせよ今後の研究が期待される。

また米原部落の北部寄りの高木郁郎氏宅地内には「紀屋敷」の地名が残っている。これを部落ではマツリヤシキと発音する。現在宅地の周囲には割って積んだらしい建物の礎石材や、加工石材の堆積をみるほか、遺跡または遺構を物語るべき要素は何らみられない。宅地内は約 90 平方mもあるので、今後

第32図　米　原　西　方

ボーリングまたは発掘調査すれば、或は何らかの遺構が発見されるかもしれない。ちなみに大宰府の役人には肥前の土豪紀氏が、大監・少監その他の官職に就いていたことを物語る記録はあるが、鞠智城との関係は見当らない。また「紀」を「マツリ」とはいかにしても読めないのに、あえて呼称するのはどうしたことであろうか。或は祭祀を行なったところであろうか。

その他部落内には中世の名田をおもわせる地名が少なくない。まず「紀屋敷」の東隣には「弥次郎丸」と「恵庵屋敷」の地名が併存し、その東隣には「六郎丸」の字名がある。さらに部落の南端、公民館の前には「乙丸」の地名があり、部落唯一の商店迫本ツル子氏宅地には「屋敷」の地名を存する。おそらくこれらの地名は鞠智城とは無関係であろう。また公民館の北方、原田秀喜氏宅一帯に「中グリ」の俗称名を存するのは、この一帯に散在する五輪塔や石碑につながる、寺院があったことを物語るのではなかろうか。尚、米原部落の西北端、矢野形家氏宅裏に祭られている「岩倉山」は、自然の岩塊を数個集積した小祠を祭り、たとえ現在の施設は近代の所産でも、祭そのものの形態は古くさかのぼるにちがいない。

部落の西北隅の最もひくい位置にある「長者井戸」は、部落民の飲料水を供給する大切な天然の湧水池で、年中豊富な水量を保持する。

(11) 長者原の遺構

ここにいう長者原という地名は、米原部落の南側入口「六ン蔵」から、北は部落公民館付近まで、東は米原への幹線道路をもって限られ、西は長者山、御金蔵の東麓一帯にわたる約4・5ヘクタールの地域を総称する。この一帯に建物の礎石群があり、炭化した米を出土することは早くから知られており、おそらく米原長者の伝説や、米原の地名もそのことからおこったにちがいない。

の　山　（この山脈の頂部に土塁が近々と残る）

第33図　少　監　ど　ん

文化6年（1806年）石上宜続の著わした『卯花園漫録』によると「肥後国山鹿郡不動倉といふ所」に焼米を出土することがみえている。おそらくこの不動倉という地名は、当時の関係史料から考えて、文徳実録天安2年の条にみえる「菊池城不動倉十一宇火」の記事に比定するのあまり、現存地名の山鹿市にある不動岩と混同し誤まったものとみえる。故に米原の焼米はよほど古くから広く知られていたにちがいない。このように長者原における焼米を多量に出土する現象は、石上宜続の誤った記事をまつまでもなく、天安2年に焼失した菊池城の不動倉十一宇の遺構を物語っていることはいうまでもなかろう。

現地にはもと畑をめぐって多くの建物礎石群が整然とした配置で残っていたが、米原部落に入る南からの幹線道路をつくったさいに、多くの礎石は道の下に埋没したという。加うるに去る昭和41年の開田工事には10数個の礎石が掘りおこされたが、菊池市の庭園師に引とられたといわれる。

現在礎石列の残るのは熊本県の指定標木のたつ高木則行氏の水田、および水田用揚水ポンプ小屋に接した原田信裕氏の桑畑、この北隣に位する堀野隆氏田。さらにその北隣にあつて全体の約半分は埋めたてられた高木二一氏の水田などである。その他にも乙丸の水田(米岡孝臣氏所有)その西約20mに位する矢野形家氏所有の水田などである。中でも昭和43年2月の調査によると高木則行氏の水田には、長辺がほぼ南北にむかう4間2面分の配置をもって、建物礎石列がならぶことがわかった。もちろんこの調査はボーリングによって探りあてたもので、発掘露出すればさらに大きな規模を呈するにちがいない。本年度の調査には時間的にも労力的にも余裕がなかったが、近い将来にはぜひ礎石列の再現を期したい。

掘切、一寸榎方面から米原へ入る幹線道路の東側、すなわち字上原には、何ら遺構らしいものを発見できなかった。わずかに公民館寄りの農道に礎石2個を発見したが、すでに開墾のさい動かしたとみ

え、周囲から現代遺物が出土した。また開田された直後にはわずかながら布目瓦や土師器、須恵器の細片が採取されたが、それだけでは何のきめてにもならない。

次に米原の地名起原ともなり、米原長者の伝説を生むにいたった焼米の出土地点については、ほぼ次のようなことがわかった。米原部落の人びとの話によると長者原の幹線道路の西側に展開する水田や畑には、ほとんど全面にわたって焼米を出土するという。しかしもっとも濃厚な分布がみられるのは熊本県の指定標木の立っている一帯、とくに高木則行氏の水田と小道をへだてて隣接する高木辰彦氏の水田、および揚水ポンプ小屋付近の桑畑と水田などである。とくに迫にのぞむ高木二一氏の畑にはおびただしく、地下約30cmに層をなすところがあるという。今回も耕作されたあとから、約5合分ぐらいの焼米を採取した。

尚、長者原一帯から採取される炭化物には、焼米のほかに粟・稗・小麦などの雑穀類が炭化したものもみられる。とくにこれらの雑穀炭化物は長者原の共同墓地周辺に多かつた。

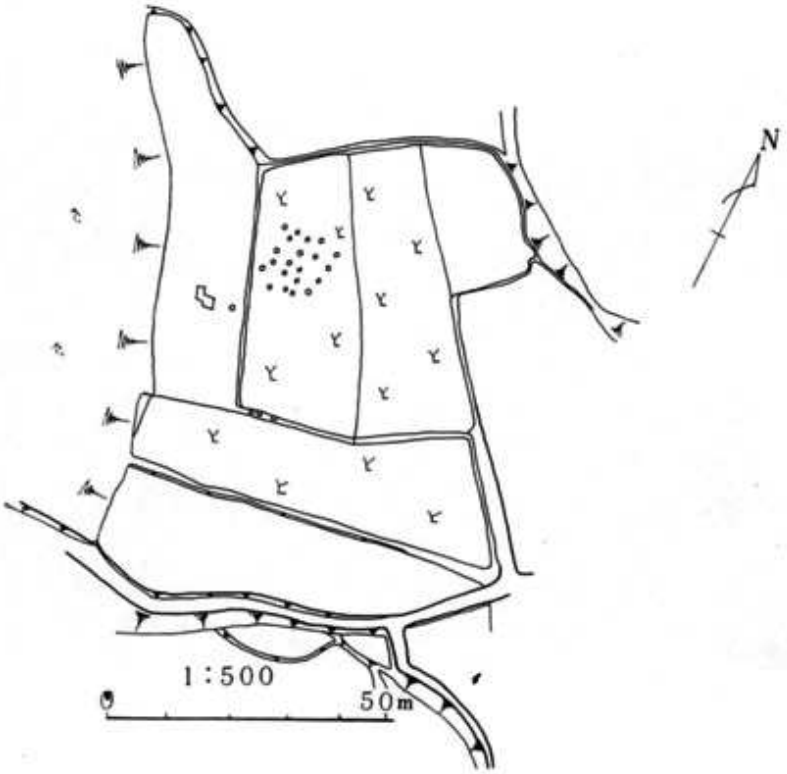
第34図　長者原礎石列（礎石は白線内に埋没している。）

(12) 宮 野 礎 石 群

米原長者の御金蔵跡と称する長者山の東麓には、従来多くの古瓦を出土した。しかるにその遺構はもちろん、何の手がかりもえられなかったので、昭和43年度にはこの地区の全面的な発掘を予定していたが、たまたま今年の3月に入ってブルドーザによる開墾が行なわれ遺跡は消滅した。

開墾直後に行きあわせたわれわれは、古瓦の堆積している地点2箇所をえらびトレンチを掘開したが、すでに土層は攪乱され遺物だけを採取したにすぎない。古瓦は平瓦と丸瓦からなり、荒い布目のあるものと、ヘラ目のあるもののほかに、格子目文を有するもの数片があった。それらの量は破片点数にして約5—60片にのぼり、おそらく鞠智城創築当時のものと推定される。すでにブルドーザは多くの古瓦を、北側の低地埋立にさいして再発掘することさえできないほど深く埋めてしまった。おそらく長者山東麓宮野における新しく開墾した地区には、1—2棟分の建物が想定されるが、今となっては確かめようがない。

昭和43年3月、新しく開墾された長者山の東麓地区には、古瓦出土地のほかに礎石群の埋没することがわかった。もちろんそれらの礎石群はボーリング作業でつきあてたもので、全体の配列や規模にはま



第35図　宮　野　地　形　図（⁞⁞⁞礎石列）

だ疑念がある。しかし石のならびを図上復原によって判定した結果、この建物は長辺が南北にむかい、5間3面をなすもののようである。何ぶんそれらの礎石列は桑畑の下に埋没しているため、全面的に発掘することは困難であるが、将来水田化されない限り保存条件はよい。昭和43年度の調査にはこれらの礎石のうち、一部だけでも露出し、建物の全体配置を把握する計画である。

尚、宮野の米岡孝臣氏所有桑畑では建物1棟分の礎石群しか探索できなかったが、すでに畦畔には自然礎石の移動したもの3個が寄せられており、ボーリング作業をつづけると他にも数棟分の建物が確認されるであろう。表面採取の結果、古瓦の細片は、迫の農道にのぞむ崖線まで、かなり広範囲におよぶことがわかった。（乙　益　重　隆）

第36図　宮野瓦出土地状況

第37図　宮野礎石列所在地（礎石は白線内に埋没している）

小　結

鞠智城の調査が企画され、ようやくそれが着手されたときにはやや時期おくれの感があった。すなわち米原部落内に残る礎石列はすべて変形移動し、城門礎石のごときも旧位置のままを存するものがほとんどなく、古代山城のあとを物語る遺構はすでに消滅したのではないかとさえおもわれた。とくに昔から最も重視され、米原長者の伝説を生み、地名の起原ともなった焼米出土地は未調査のまゝ水田化され、加うるに古瓦出土地として知られる御金蔵東側の宮野まで、不用意に開墾されてしまった。しかるに調査に着手してみるとこうした懸念は氷解した。さすがに城は雄大な規模と多くの重要施設を擁したところだけに、新しい知見があいつぎ予算と時間の不足をかこつほどであった。すでに個々の物件、ならびに遺跡、遺構については各項に詳しいのであらためてくりかえさないが、来年度以降に実施すべく見送った計画は少なくない。その主なものだけをあげると次の事項がある。

1、城域の確認。

2、山頂をめぐる土塁線の分布図作成。

3、土塁の発掘と実測。

4、御金蔵の測量と礎石列の実測。

5、少監どんの発掘。

6、紀屋敷における遺構確認のための調査。

7、宮野礎石群の露出と実測。

8、長者原礎石群の露出と実測。

9、池ノ尾門礎石垣線の発掘。

10、土塁の分布調査。

11、土塁の発掘。

12、周辺の調査。

13、その他昭和42年度分の補正調査。

以上、今年果せなかった事項だけでもばく大な作業量が残っており、これらを完全に遂行するにはわずか1—2年でできるものではない。むしろ長期にわたって継続的に調査を遂行することによってこそ、はじめて鞠智城の実態は明らかになるであろう。（乙　益　重　隆）

第38図　米原地区測量図

調 査 日 誌（抄）

第 1 次 調 査

昭和42年7月24日（月）晴

午前11時宿舎延命館集合、午後2時から結団式　後米原台地周辺の地形、遺構を見てまわる　夜調査員会議、調査計画、内容、目標、分担、問題点について討議する。

7月25日（火）曇時々小雨

時々の小雨をついて調査は開始される。鞠智城跡北西部外郭線と想定されていた竜徳、頭合、堀切一帯の踏査を開始する．密生した山林のため歩行も困難である。馬こかしは人夫による伐採と平行し測量杭打ちをはじめる。深迫の門礎石地点は測量と共にトレンチを入れる。米原地区測量も骨組測量を進める。

7月26日（水）小雨時々晴

池ノ尾門礎石の調査をはじめる。外周班は米原台地西側の山林中を遺構を求めて歩きまわり、深迫、馬こかし作業は順調に進む　夜の研究会で鏡山教授から指導をいただく。

7月27日（木）晴

馬こかし、池の尾、深迫、測量各班順調に作業は順調に進行する。

7月28日（金）晴

深迫のトレンチ面積を拡張する。馬こかしの石垣の測量を終る。池の尾門礎石の付近で土塁等の遺構をしらべたが明確なものは出なかった。踏査の結果外郭線は米原、宇田原の崖線ではないかと考えられるようになった。

7月29日（土）晴

猛烈に暑い。堀切門礎石の作業にかかる。堀切部落から13名の労力奉仕があり、約2m下に埋まっていた礎石を露出していただく。深迫門礎石周辺のトレンチを拡大する。三枝の実測にかかる。キンガシラ、稗方を結ぶ外周線も調査したが人工的遺構は見られず。

7月30日（日）晴

堀切門礎石実測、地形測量を進める。佐官どんは昨日午後から下刈を開始したが午後露出していた礎石と思はれる石のまわりを掘り出す。

7月31日（月）晴午後3時頃からひどい夕立にあう。

堀切、深迫、三枝各班共に測量実測を進める。佐官どん発掘と平行し実測を進める。鏡山教授九大学生4名来る。

8月 1日（火）晴午後夕立

堀切、三枝、佐官どん調査を終る。外周線は鏡山教授と坂本らまわる。米原部落婦人会からおやつをいただく。

8月 2日（水）晴

各班とも図面の修正、深迫をじめ各発掘地点の埋めもどし、物品整理等を済ませる。現地で午後1時30分から調査結果報告会および解団式をおこなう。

第 2 次 調 査

昭和43年 3月 9日（土）晴

午後6時宿泊地延命館に集合、第2次調査については打合会をひらき、調査対象、方法、任務分担について討議する。

3月10日（日）晴

米原地区 500分の1図の修正。ステッキボーリングの結果、長者原の高木則行氏水田、地表下50cmに礎石列1群を発見する。

3月11日（月）曇後雨

ボーリング調査を進めたが確実な遺構は発見できなかった。長者原の揚水ポンプ室付近では礎石群があった地点を教えられたが、開田によって1m以上埋まり、たしかめ得なかった。宮野の開墾地で瓦がかたまって出土する。

3月12日（火）

宮野の瓦出土地は遺構に直接結びつかなかったが、その東の桑園中地表下60cmで礎石列を発見する。地形測量と共に礎石列の実測図を作る。午後3時調査を終る。

昭和42年度埋蔵文化財緊急調査概報

昭和43年3月

発行所　熊本県教育委員会
熊本市出水町今915

印刷所　水前寺印刷株式会社
熊本市水前寺本町116

082

この電子書籍は、昭和４２年度埋蔵文化財緊急調査概報を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：昭和 42 年度埋蔵文化財緊急調査概報：伝鞠智城跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話：　096-383-1111

URL：https://www.pref.kumamoto.jp/

電子書籍制作日:2024 年 9 月5日